A.0007

あります。

保険が出るつもりが出なかったというみっともないケースはありません。

が、

その１

　夏に友人宅で扇風機のコードを足に引っ掛けて、壊してしまったことがありました。ガシャーン、みごと動かなくなりました。「いつ頃買った？、いくらくらい？」と友人の彼女に尋ね、その場で現金決済(=弁償)しました。いやぁー、個人賠償特約(日常生活賠償特約)のことなんざ、スッカリ忘れておりまして……。「あれ？、保険がきくじゃん」と気がついたのは、その年の冬、継続手続（更改)の際というありさま。

　お客様には「なにか、突発的なことで臨時出費のあるときは、電話ください、意外と保険がきくことがありますから」と助言を繰り返している我が身が、です（泣）。

　ささやかなノベルティ、社名電話番号入りのカレンダーやボールペンの類を極力お渡ししようと努めているのも、「そうだ、グット・ライフにきいてみよう！」と何かの折に思い出していただきたいからです。お会いすれば、「あの、こんなことがあったんだけど……」というご相談の機会が増え、かなりな数の保険事故の受け付けがふらぁーと立ち寄って、顔見せた際です。

その２

　学生のときに、母親が「年金」を掛けていてくれました。就職したときに、あとは自分でやりなさい、止めてもいいけど、きっとのちのち役に立つわよ」と言ってくれたのですが、止めてしまいました。給料をもらうと、やっと好きなだけ本が買えると、ほとんど問屋（取次）の店売（ﾃﾝﾊﾞｲ）で本になりました。5000 円の専門書、1 万の全集配本は、まったく高いとは感じませんでした。ですが、月 7000 円の年金は、20 代の青年にはムダに感じられたし、本に比べりゃ高かった。ですが、ですが、ね、続けときゃ良かった。
　いまとなっては、読み切れないほど本はあるし（しかも買い続けている！)、年金ったって、働けなくなるまで働くのだろうから、使い道が無いのは本と同じか、と無理きり自分を納得させようとしております。
　他山の石としていただきたいのは、無理のない金額(規模)で、なにより長く続けるということが保険では肝要だということです。